

研究・調査報告書

報告書番号	担当
3 5 7	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門
題名 (原題/訳) Culture of drinking and individual problems with alcohol use. 飲酒文化とアルコール使用に関する個人の問題	
執筆者 Ahern J, Galea S, Hubbard A, Midanik L, Syme SL.	
掲載誌 (番号又は発行年月日) Am J Epidemiol. 2008 May 1;167(9):1041-9.	
キーワード アルコール摂取、アルコール毒性、文化、居住特性、性別	
要 旨 <p> 多量飲酒は本質的で増加している健康問題である。飲酒と酩酊に関する共同体の基準は個々の飲酒問題に影響を及ぼすかもしれない。2005年にニューヨークで行われた Social Environment Study(n=4,000)がデータを用いて、近所の人々の飲酒文化と個人のアルコール使用の関連を検討した。彼らは社会的階層分化と社会淘汰を記述する方法を適用しており、近隣の人々の研究を解釈するという挑戦でもある。調整されたモデルでは、近所の人々が飲酒に寛容であることは適度の飲酒(オッズ比(OR)=1.28、95%信頼区間(CI): 1.05、1.55)に関連しており、多量飲酒と関連していなかった。しかしながら、ソーシャルネットワークと個々の飲む基準は関連していた。対照的に、近所の人々が酩酊に寛容であることは、適度の飲酒(OR=1.20、95%CI: 1.03、1.39)、多量飲酒(OR=1.92、95%CI: 1.44、2.56)と関連していた。多量飲酒との関連はソーシャルネットワーク、個々の酩酊標準を調整しても関連していた(OR=1.58、95%CI: 1.20、2.08)。酩酊標準は男性よりも女性で多量飲酒と強く関連していた(p for interaction=0.006)。特性の分布と飲酒歴の調整した結果が示すように、社会的階層分化と社会淘汰は各々、観察された結果についてのもっともらしい説明ではなかった。有害な飲酒を形成する社会的、構造的な要因を考えることによって、アルコール消費の問題点に絞った影響を伝えるであろう。 </p>	